

カナダのブリティッシュ・コロンビア大学のエリザベス・ダンらは、他の人のためにお金を使うと予想外に幸福感が増すという仮説に整合的な実験結果を報告しています。実験では学生の参加者に5ドルか20ドルを朝に与えて、午後5時まで使うように指示しました。その際、一つのグループは自分のために使うように、もう一つのグループは他の人のために使うよう条件をつけました。参加者は朝にお

## やさしい こころと**経済学**

### 第2章 倫理観・価値観と絆 8

慶応義塾大学教授 大垣 昌夫

金を受け取る前と、夕方にお金を使った後に、幸福感を測る質問に答えました。

参加者の幸福感の上昇は他の人のために使った方が、自分のために使った方よりも統計的に有意に高かったのに対し、5ドルを受け取るか20ドルを受け取るかは幸福感に有意な影響は与えませんでした。

我々は、自分のためにお金を使うと幸福になると予想しがちなのですが、これは誤解であって、現実には他の人との絆が深まる行動をすると幸福になっていくことを示唆する実験結果です。

このことは規範経済学の役割を考えるうえで重要です。経済学の標準モデルである新

## 他人の役に立ち幸福に

古典派モデルでは、個人は自分の効用（満足度）を完全に理解して効用を最大化して行動すると仮定します。

しかし現実には、多くの人が効用だけでなく、絆から得られるエウダイモニア（充実感）も含む幸福感が上がることを望んでいます。ただ、どう行動すれば幸福感が上がるか理解していないとすると、規範経済学は個人に有用な助言をする役割がありません。例えば、絆を深めるには、

寄付やボランティアなどの利他行動をすると幸福感が増すことを個人が実際に積極的に体験したり、教育したりできる環境を整備することが重要になります。子供たちに寄付教育をするなら、多くの寄付先を用意しておくことより、先が自分で寄付先を考え、他の子供たちとなぜその寄付先が重要と思っか話しかって選べるようにすれば、より大きな教育効果が望めます。